

健康

火・木・土曜日掲載

新がん遺伝子変異特定

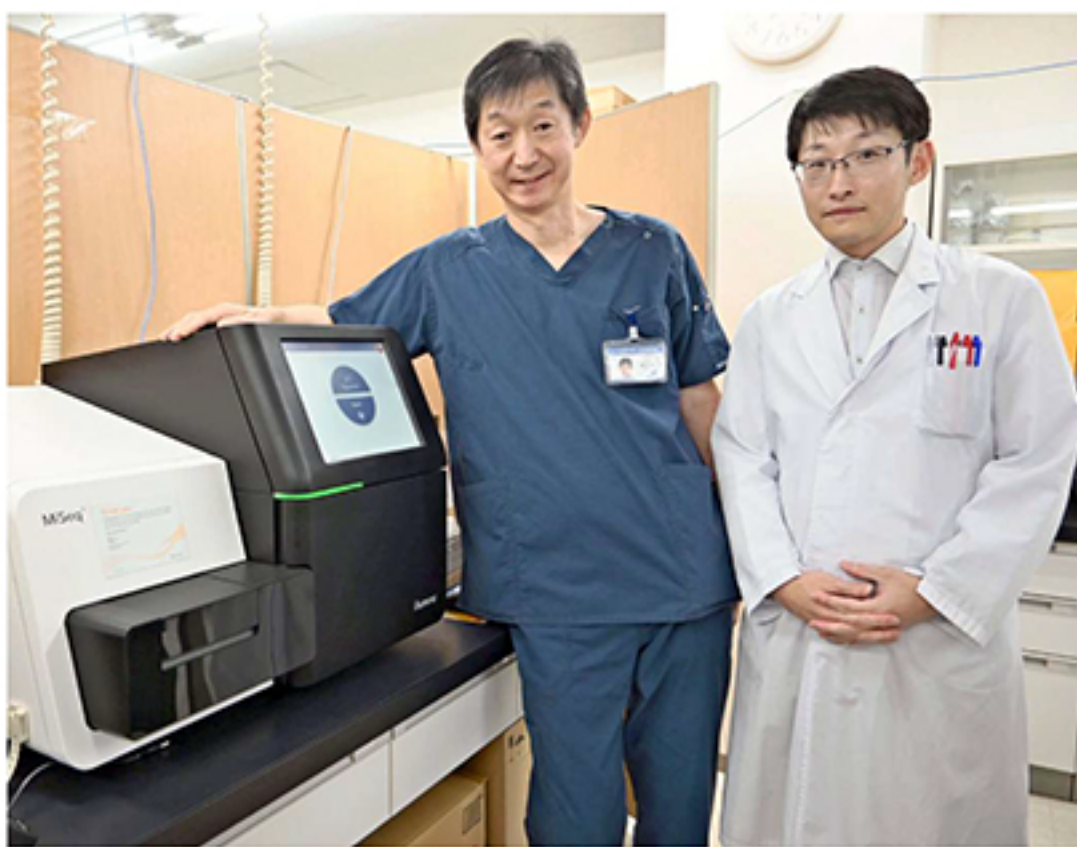
医学雑誌
論文掲載

「標準治療」改善へ期待

北斗病院(帯広市稲田町基線7)の坂東伸幸副院長(58)を中心とする研究チームが、抗がん剤などの標準的な治療には反応しなくなる新たながんの遺伝子変異を特定した。公的医療保険の対象となる「標準治療」の将来的な改善の一助となることが期待される。

坂東副院長の専門とする喉頭がんの治療実績と併せて、論文が国際医学雑誌に掲載。坂東副院長は「膨大な時間を費やした成果が出てうれしい。若手医師にも引き継いでいきたい」と喜んでいる。論文は、欧州の国際医学雑誌「Molecular and Clinical Oncology」に掲載された。

北斗病院 坂東伸幸 副院長ら研究チーム



研究チームの一人、馬場晶悟研究員(右)と、使用した機器次世代シーケンサーの横に立つ坂東医師

同病院は研究目的のため取り出し解析するがん細胞の遺伝子異常の有無を分析する「次世代シーケンサー」を導入。院内の数十年後に公的医療保険

喉頭がん 声帯またはその付近に発生するがん。喫煙が関連する。最初の症状は声がれ、喉の違和感、息苦しさ。進行すると転移した首のリンパ節が腫れる。全身に転移し命を落とすこともある。早期であれば約7週間の放射線治療のみで根治する。進行している場合、声帯を失う咽頭全摘術を行うことが多い。人口10万人当たりの年間罹患率(りかん)率は3・8人。年間約4800人が発症し800人が死亡している。5年生存率は81・8%。

適用にもなる標準治療の改善への道が開ける。また併せて発表した同治療しても再発につながるがん遺伝子の変異を調べるため、18年から25年まで同病院を受診した53〜91歳の患者24人を対象に分析した。その結果、喉頭がん全体の8%と少ないものの、「PIK3 CA」と呼ばれるがん遺伝子に変異があると、放射線治療が効きにくく、再発しやすいことが明らかにになった。

PIK3 CAがん遺伝子に異変がある場合、治療強度を上げる必要があると考えられるものの「標準的な治療が定められているため、現状ではそのような治療はできない」と(坂東副院長)。さらなる研究の蓄積が世界的に必要という。

一方、今回分析した患者の96・6%が現在または過去に喫煙をしており、中には声帯を摘出せざるを得ない患者もいた。坂東副院長は禁煙の大切さを訴えるとともに、「風邪と思っているのがんの発見が遅れることもあるので、喉がかわれば早めに受診してほしい」と呼び掛けている。

(高井翔太)